

横浜市民広間演奏会のあゆみ 第4幕 <部会の成り立ち>

昨今では様々な地域で行われている役所での演奏会。1967年から誕生した横浜市民広間演奏会はその先駆的存在で、様々な役所の方々が視察に訪れていたようです。そして現在も横浜の文化の発展に音楽で貢献したいという発足当時の思いと共に春と秋に市庁舎での演奏会が続いております。

2002年からは自主運営を始め、会員が各部会に所属し、会費も徴収するようになりました。自主運営を始めた当初は、地図もなく経験もない音楽家が道なき道をとにかく歩み、目的地<演奏会>に向かう！！という様相。応援して下さる人々の「大丈夫！出来るから！！」の言葉を信じ、とにかく会員一丸となって道なき道を歩んでいったそうです。

部会の成立順序がまさにこれを物語っています。必要に迫られた部会から立ち上がりました。1番最初に出来たのが春の部。今までは市役所の方々にお任せだった人選、プログラム作り。とにかく大急ぎで間に合わせたそうです。また以前は市役所の方々にお任せしていた演奏会当日の様々な準備や、司会も自分たちで行うことになりました。いざ自分たちでやってみると慣れないことに、演奏するより緊張してしまう人も多かったようです。その当時の部長さんは演奏会が滞りなく開催できるか不安で、毎回演奏会の度に市役所に通い、お手伝いをしていたそうです。

～毎回演奏会の度にいるので市役所の人と思われてしまったほど。聴きに来てくださる常連の方の中には、「来週は温泉に行くから来られない。」といった報告をしてくださる方もいらっしゃいました。また当時はマイクなどの音響設備が万全ではなく、司会の言葉が聞こえづらい時は、お客さんから「聞こえないよー」と掛け声があったり、舞台の電気が点いてないときは教えてくださったりしました。お客さんの中には気持ちよくなって一緒に歌ってしまう人もいました。「演歌はないの？」と声があると、他のお客さんが「ここは違うの。」と助け船を出してくださったりしました。クラシック音楽を生で聴くのは初めてという方もいらっしゃったと思います。～（会員談）

2番目に秋の部、そして「市からの助成だけに頼るのではなく、市役所を飛び出し様々な場所でチャレンジしよう。」と3番目に企画部が立ち上がりました。

そうして活動にも広がりが出てきたころ、「会員の皆さんに決まったことをお知らせしたり、いろいろな活動を報告する部が必要なのでは？」と声上がり、4番目に広報部。そしてオーディション部が立ち上がりました。会員の自主運営によつての初めてのオーディション

では要綱作りから始まりました。様々なオーディションの要綱を集め、研究し、制作したそうです。

～応募があるかとても不安でした。たまたま横浜駅でばったり会員の方に会い、沢山の方々がご応募してくださった事を知ったときは抱き合って喜びました。今でもその時のことはよく覚えています。～ (会員談)

そして最後に様々な部を統括する組織部、会計ができました。諸先輩方が歩んできた半世紀の間、「生の良質の音楽を市民に届ける。」という佐藤美子先生の志が受け継がれています。